

アリ、麟太夫ノ左右ニ高槻浪人山本林左衛門及ビ阿山良輔アリ、而モ是等人
 名諸書同ジカラザレバ或ハ誤傳ナシトセズ、尙其他此種ノ行列中瀬田藤四郎
 宮脇志摩、竹上萬太郎、深尾才次郎、横山文哉等ノ名ヲ列シタルアリ、而モ
 瀬田藤四郎濟之介父ハ病氣ノ爲ニ早ク難ヲ河内ニ避ケ、宮脇横山等ハ戦機ノ錯誤
 ノ爲ニ軍ニ會セズ、竹上萬太郎ハ事ニ及デ怯懦逃走シ、深尾氏ハ百姓百餘名
 ヲ率テ京橋口ニ來テ路通ゼズ事ニ及バザルノ類區々トシテ皆多少ノ出入アリ
 又軍ノ表章タル旗幟ニ就テハ極テ注意スベキモノアリ、回天記ノ記スル所ヲ
 舉グレバ左ノ如シ。

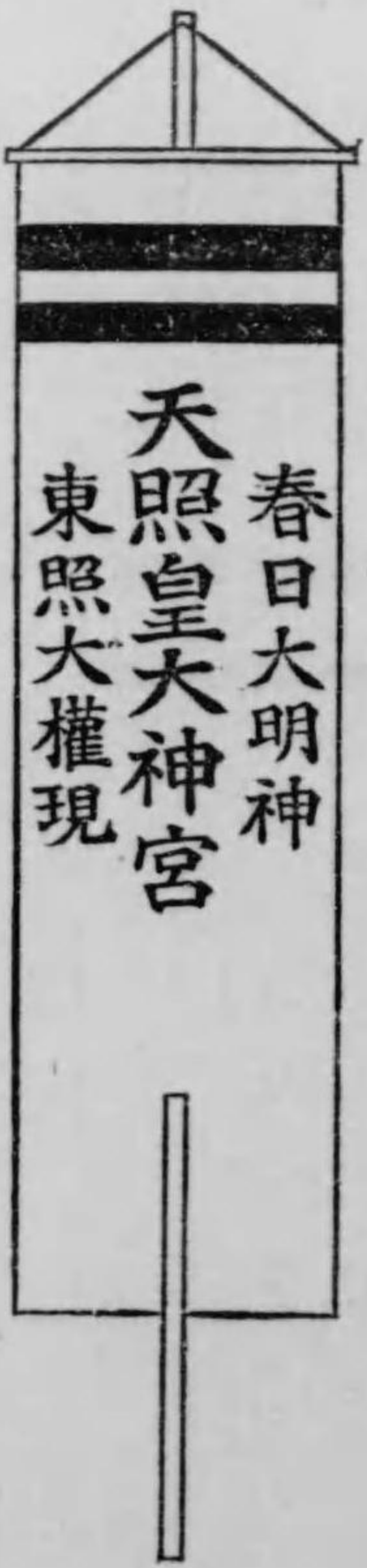
先手の印幟



白木綿地丈ケ五尺幅二尺

中陣之旗

白木綿地丈ケ一丈五寸幅二尺



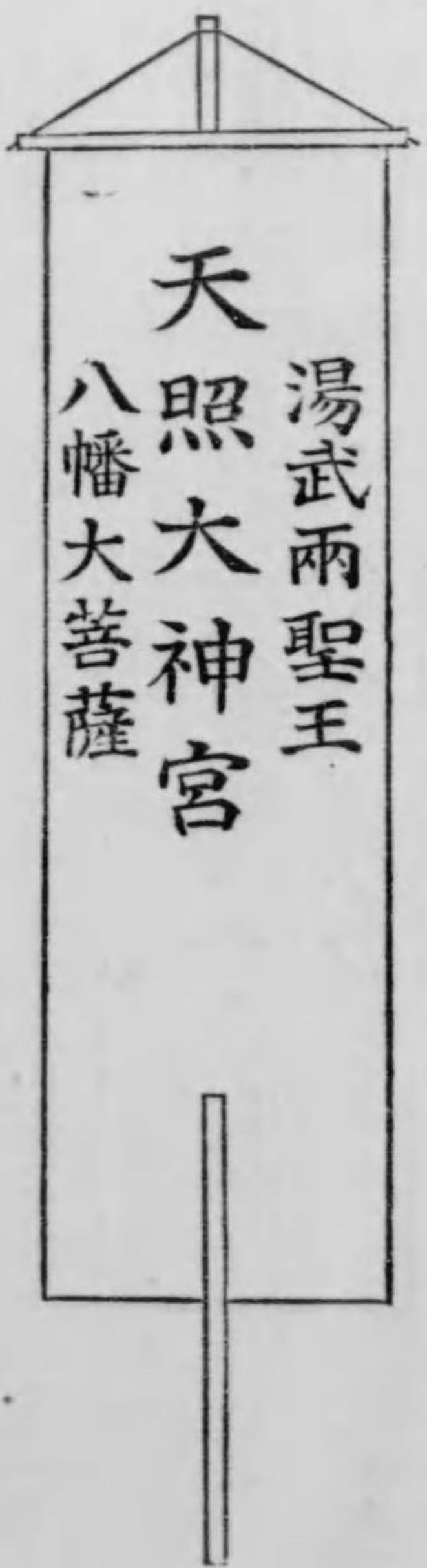
中陣之旗

同上



先陣右方之旗

白木綿地丈ヶ一丈五寸幅二尺



先陣左方之旗

同上
大鹽の家紋は蝶の丸なり平八郎此時本姓
今川に復するを以て五三桐の徽號を用ゆ



小 指

白木綿地丈ヶ八寸幅七寸



但し此の分二百本餘有之
人造無之標百姓銘々腰に
指し候ものなり

此種大小ノ旗幟ハ即チ靱油掛町ノ義商美吉屋事鹽田五郎兵衛ノ調製ニ係ルモ
ノ、旗幟ノ記録ハ文書傳説大抵一致セリ、只法華經七字ノ題目旗或ハ之ヲ載
セザルモノアリ、云フ日蓮宗ノ徒先生ノ義舉ヲ藉テ世ニ誇示セントシテ茲ニ
假託撰入スト、而モ先生ノ家法華宗ニ屬シ、尾陽宗家ノ復タ同ジク法華宗タ
ルノ因縁ナシトセズ、尙ホ當時義盟ノ士亦其大部分同宗ニ屬セシヲ見バ必ズ
シモ假託ヲ以テ排スベガラズ、旗幟陣様既ニ斯クノ如シ、若ソレ先生當日ノ
威貌如何。

天満水滸傳云 其日總大將大鹽平八郎が出立には、白小袖の上に黒羽二重の紋付を複ね、銀もうる野袴を穿き、太刀造りの大小に黒羅紗の陣羽織、鍬形打たる廿四間白星の甲を着し、手に赤き采配を取て人數を指揮す、其年齢四十五六歳にして、面長く色白く、眉毛逆立、眼袋大きく、眼光人を射、中肉中丈、威あつて猛からず、言語爽かにして水の流るゝが如く、誠に何れへ出しても一方の大將とこそ見えにけり。

又之レ一見稗史的形容ニ過ギザルガ如キモ、當時人相觸書ノ文書末ニ其節着用鍬形付兜黒陣羽織云々ト相符スルヲ見レバ亦以テ其ノ誇張ニ非ザルヲ知ルニ足ル。

是ヨリ先跡部山城堀伊賀等各其ノ部下ニ命ジテ手配セシムル所アリ、準備未ダ成ラズ、先生ノ軍疾風迅雷事意外ニ出テ勢甚ダ猛烈、建國寺焼失ス、軍旣ニ出動ス等注進櫛ノ齒ヲ引クガ如ク事甚ダ急ナリ、而シテ狐疑逡巡未ダ自ラ發スルコト能ハズ、是ニ於テ初テ城ニ登テ城代土井大炊頭ニ事由ヲ訴ヒ、又

定番遠藤但馬守ニ依テ援兵ヲ請フニ至ル。

兩奉行書取云 平八郎始賊徒の者共多數手にく、白刃を携、或は大筒小筒等烈敷打掛、松明様の物打振、右往左往に立騒ぎ、追々組屋敷邊焼立、火勢強く難近寄旨申聞候付、早速石渡彦太夫御手洗伊右衛門へ掛合、御鐵炮同心一同鐵炮を以、可打拂旨差圖仕候得共、手足兼候付猶又遠藤但馬守へ掛合、兩御番組與方同心呼寄種々手當云々。

天満水滸傳云 偕城州には我手の與方同心共にも、皆々大鹽が黨類にもや其志斗り知れ難く、爰に聊か狐疑を起して少しも心を免されず、然れど其儘に居らん事も臆したるに似て快からず、如何はせんと思案の内、屹度心に點頭かれて、御城内なる城代土井大炊頭に至られ、對面の上述べられけるは偕此度の一儀容易ならざる次第にて、早天々滿より事起り其騒動大方ならず、早速出馬いたし制方の手配り差圖に及ぶべき處、組の者共大鹽へ荷擔の程も斗り難く、迂濶に召連出張いたし、萬一途中にて違變あらば不

束にも相當り、夫のみ當惑に思ひ候、依て何卒玉造組の與力へ尊君より仰渡され、是を拜借仕り出馬いたし度候也。

城代土井大炊頭是ニ於テ始テ事ノ顛末ヲ聞キ大ニ驚キ、跡部山城ノ請ヲ容レ遠藤但馬守ヲシテ援兵ヲ出サシム、但馬守即チ用人畑佐秋之助ヲシテ玉造組與力坂本鉉之助本多爲助ニ城州應援出動ノ命ヲ傳フ。

本多爲助談

浪華騷擾記云 拙者共は御城警衛の役目にて、町奉行の役宅へ相詰候は不筋と存候處、常々歸服致候但州の下知有之候上は、達の通可心得と拙者共町奉行役宅へ相越候處、山州の方にては加勢の來るを待兼、途中迄頻に迎ひの者を遣候に付、一同急ぎ役宅へ入候得ば、屋敷内甲冑着用の者多數相見え、拔身の得物等押立置候付、あまり慌て候様子と存候、玄關より通り候得ば、與力用人等追々罷出、敵は大筒を心懸中々不容易勢に相聞へ申候間、何卒大筒御持參被下候様、頻に頼み有之候得共、但州の下知も無之旨申述候へば、山州逢可申由に付、致對面候得ば、山州も具足着用かぶと高

出兵問題
兩組ノ衝突

紐にかけ、庄几をはずし丁寧に會釋、早速加勢として御出辱なく候得共、追々家來を以て御頼申候通、大筒御持參の儀偏に御無心候との事にて、奉行の右様申聞候上は次第無之儀と、熊次郎へ申合、直に山州の馬を借り、大筒心懸の爲め熊次郎は引返候云々。

按スルニ山州援兵加勢ノ出願ハ組下手不足ヲ理由トセルハ事實ナルモ、山州ノ此ノ一舉ニ對シテ卑怯狼狽ノ結果ニ出デタルヲ掩フベカラズ、既ニ三日前ノ内訴ヲ聽テ手ヲ措ク所ヲ知ラズ、今日ノ大事ヲ讓シテ手不足ヲ訴フル此ノ理アルベカラズ、而シテ城代ノ直ニ之ヲ聽セルハ事ノ急ナルヲ以テ止ムベカラズトスルモ事理輕卒ヲ免カレズ、故ニ遠藤但馬ノ用人畑佐秋之助ヲシテ玉造京橋兩組ノ加勢出動ヲ命ズルヤ、玉造組ハ直ニ畏リタルモ京橋組ハ之ヲ以テ甚ダ迷惑トシテ一致セズ、蓋シ阪本鉉之助本多爲助玉造組ハ不筋ナレドモ平生歸服セル但州ノ命令トシテ之ヲ諒解シタルモノニシテ、廣瀬治左衛門、馬場左十郎京橋組ハ定番米倉丹後守未ダ着任セズ、遠藤但州預リ中ニ在リ情

誼自ラ同ジカラズ、即チ固ク加勢不筋ノ理ヲ唱ハ、因テ玉造組ト計テ相共ニ加勢ヲ辭セントス、而シテ兩組遂ニ衝突ス、兩組ノ衝突ハ又上司ノ輕卒ヲ見又城兵ノ情偽ヲ窺フニ足ル。

撰華護捷記
本多爲助談
參照

咬菜秘記云 治左衛門貞に向ひ當役所警固の儀、御頭よりの仰渡と雖も、元來銘々共は御城門を警衛するを本職として、御門を離れ役所位の所に於て、犬死同様の働を致すは一同迷惑千萬に存する也、第一拙者共も不承知に付御相談に参りたり、夫故鐵炮等も持參不仕との口上にて、其心は貞をも味方に引入れ町奉行加勢の願ひ斷るべしとの下心に見えたるが、貞は御城警衛の本職は申までもなきことなれ共、頭申付とありては生駒山を越候ても出張致さねばならず云々、治左衛門重ねて口を開き頭御出馬といへば格別、左もなく銘々計當役所へ参り警固に従ふは、何か町奉行下知に就くやうの次第にも相聞、先年出水の節町奉行より兩組に町廻りを致しくれ候やう、城代松平日向殿へ内願ありし所、兩組は大切の御城警固の者なり

先例モ亦不可

町奉行所へ貸候儀は組柄にも拘はり、難儀なりとの仰にて沙汰止となりし由承及候、其上假令頭の申渡にても、承引仕り難き事は再應申上御沙汰替に相成候例も有れば、仰渡なればとて一概にお斷り成り難きにもあるまじく其爲御相談に参りしとの事なれど、貞は今日の儀は何分御手前と拙者とハ所存違につき、御手前にて御勝手次第に爲さるべく、別に當方には御相談に及び不申といへば、如何様にも御勝手にと彼一句此一句、語勢も次第に荒くなりし所へ、畑佐秋之助参られ、味方同志の口論もやみ、治左衛門は引返して同心三十人を連れ、東町奉行所へ参られたり云々。

斯クノ如ク玉造組及ビ京橋組ハ加勢出兵ニ就テ意見ヲ異ニセルモ各一理ナシトセズ、而シテ其原因ハ出兵ノ不筋上司ノ輕卒ニアリ、玉造組ハ之ヲ了解シ京橋組ハ之ヲ迷惑トセル故ニ廣瀬治左衛門ノ道理ハ内心ノ卑怯ヲ飾ルノ口實ト解セラレタルモ、坂本鉦之助モ亦自ラ其了解ニ過ギタルヲ以テ卒忽千萬ノ早合點タルヲ承認セリ、然ドモ此時坂本鉦之助ニシテ此了解ナカラシカ、大阪

城ノ休戚未ダ容易ニ測ルベカラザル也。

城代土井大炊頭既ニ跡部城州ノ訴ヲ聞キ即チ之ニ援兵ヲ許ス時ニ四時、初テ大鹽先生亂ヲ作スト聞テ城中殆ド震駭ノ狀アリ、外ニハ形勢刻々重大ヲ報ズル急ナリ、是ニ於テ土井大炊頭自ラ巡視ノ命ヲ傳ヘ、定番加番大番頭ノ將士ニ命ジテ各々其守備ニ就カシム、因テ俄ニ定番ハ玉造京橋兩組全部ヲ召集シ加番ハ其家臣ヲ督シ、大番頭ハ配下ノ番衆一同ヲ召集シ、各々持場ノ警固ニ就ク、即チ城代土井大炊頭利位、九時兩大番頭ヲ嚮導トシ定番加番ヲ從ヘ本丸ヲ巡視ス、是ニ於テ大阪城守護ノ防備初テ成ル。

當時城代以下諸侯及ビ兵力左ノ如シ。

- 城代 土井大炊頭利位 居城下總國古河八萬石
- 京橋口 米倉丹後守昌壽 在所武藏國金澤壹萬二千石
- 玉造口 遠藤但馬守胤純 在所近江國三上一萬石
- 定番 同 上

城代土井大炊頭本丸巡視

大番頭 東小屋 菅沼絨部正定志 在所三河國新城七千石
旗本百騎與力二十騎同心四十人

大番頭 西小屋 北條遠江守氏喬 居城河内國狹山一萬石
同上

山里 加 土井能登守利忠 居城越前國大野一萬石

中小 加 井伊右京亮直經 居城越後國與板二萬石

青屋 加 米津伊勢守政懿 在所出羽國長瀨一萬千石

雁木 加 小笠原信濃守長武 在所播磨國安志一萬石

御目附 中川半左衛門忠明 高二千六百七十石

同 犬塚太郎左衛門忠邦 高七百石

先生弔民義軍ヲ率キテ北船場ニ入ルヤ、三段ノ陣備ハ救民ノ旗ヲ先頭トシテ蜿蜒六七百人、旗鼓堂々北濱二丁目ヲ西ニ向フ、是レカノ檄文中ノ主要目的タル富豪退治ノ第一撃ヲ試ミントスルナリ。

大阪の金持共、年來諸大名へ貸付候利得之金銀并扶持米を莫大に掠取、未

義軍船場ニ入ル

曾有の有福に暮し、町人の身を以て大名の家老用人格等に取用られ、又は自己の田畑等を夥しく所持、何不足なく暮し此節の天罰天災を見ながら、畏も不致、餓死之貧人乞食をも敢て救はず、其身は膏粱之味とて結構の物を喰ひ、妾宅等へ入込み、或は揚屋茶屋へ大名之家來を誘引參り、高價の酒を湯水を飲も同様に致し、此難義の時節に絹服をまごひ候河原者を妓女と共に迎へ、平生同様に遊び耽り候は何等の事哉。(舉兵檄文ノ一節)

斯ル富豪ノ巢窟ハ實ニ北船場ニ在リ、今橋高麗橋一帶富限長者ノ大厦高樓臺ヲ列ベテ全盛ヲ競フモノ鹽軍ハ先ヅ之ヲ打懲シテ金穀ヲ窮民ニ分散セザルベカラズ、即チ北濱二丁目ヨリ西ニ突喚シテ鴻池三郎兵衛ヲ破壊シ、火矢ヲ放テ遂ニ之ヲ燒キ、北濱一丁目ニ島村市十郎ヲ蹂躪シテ金穀ヲ散ジ、進デ今橋二丁目ニ出テ鴻池善右衛門ニ迫リ先ヅ大炮ヲ一發シテ之ヲ威嚇シ、尙ホ狼狽去ラザルモノヲ諭シテ難ヲ避ケシメ、飽マデ金穀ヲ路ニ散シテ窮民ノ取ルニ任セ、後火矢ヲ放テ之ヲ爆發セシム、或ハ云フ軍ハ暫ク茲ニ餐ヲ命ジ軍餉ヲ

北船場一帯
ノ燒打

義軍分レテ
二トナル

傳テ後之ヲ燒撃シ去ルト、是ヨリ凡ソ附近鴻池一家(鴻池他次郎、正次郎、徳兵衛、庄兵衛、青天隱露ニ依ル)ヲ爆破シ盡シテ夫レヨリ軍ハ二手ニ分レ、本隊ハ先生自ラ之ヲ引率シテ高麗橋通ニ出テ東ニ、一隊ハ大鹽格之助之ヲ引率シテ大井正一郎之ニ從ヒ今橋通りヲ東ニ、二手並行シテ東横堀ニ出テ格之助ノ一隊ハ直ニ今橋ヲ東ニ渡テ上町方面ヲ衝キ、先生ノ本隊ハ中船場ニ侵入ス、蓋シ兩軍ノ進路ニ就テハ文書傳説區々トシテ一定セズ、杉山三平ノ口書ニ依ルニ一手ハ今橋ヲ渡リ、一手ハ高麗橋ヲ渡リ二軍再ビ合ストセルモ傳説ニ徴シ爆發ノ跡ニ見ルニ斯クノ如ク單純ナラズ、今各種ノ資料ヲ綜合シテ軍ノ進路ヲ見ルニ大略左ノ如キカ。

既ニ軍ヲ分テ高麗橋ヲ進メル先生ノ本隊ハ路ニ三井七郎右衛門ヲ屠リ、岩城屋某及ビ島屋八郎右衛門ヲ轟壞シ、惠比壽屋升屋等ノ富商ヲ爆發シテ東横堀ヲ南ニ平野町ニ進ミ、西ニ内田惣兵衛、平野彦兵衛、同佐兵衛、茨原屋萬次郎、米屋喜兵衛、炭屋彦五郎等ノ巨商家戸ヲ連燒崩壞シテ手ニ任ヒテ金穀ヲ道路ニ散シ、夫ヨリ堺筋ニ出テ淡路町ニ入り、茲ニ暫ク軍ヲ駐メテ上町方面

ノ情報ヲ待ツ。

一方今橋通リヲ東進セル大鹽格之助ノ一隊ハ路ニ天王寺屋五郎兵衛及ビ平野五郎兵衛等ノ豪戸ヲ爆撃シ、進デ今橋ヲ渡テ上町ニ出テ、東横堀ヲ南進シ内平野町ニ於テ米屋平右衛門同長兵衛兩家ヲ轟壞シ、夫ヨリ豊後町ニ出テ和泉屋勘次郎ヲ撃破シ、次テ大手筋ニ住友甚五郎ニ火矢ヲ投ツテ之ヲ燒ク、既ニシテ孤軍深ク入ルニ氣付キ是ヨリ大手筋ヲ壓迫シテ徐々ニ思案橋ヲ指シテ西ニ下ル、時ニ西南ノ風ハ中船場ノ火勢ヲ煽揚シ猛炎早ク全市ヲ掩フヲ見ル、而シテ此時未ダ一人城兵ノ影ヲ見ザルナリ、而モ一支隊ヲ以テ城中ニ迫テ敵ヲ求ムルノ尙ホ勢足ラズ、且ツ孤軍長ク駐ルノ危険ナルヲ恐レ、即チ思案橋ヨリ再ビ北ニ示威的運動ヲ起シ歸テ本隊ニ合セントス、偶々平野橋ヨリ高麗橋方面ニ出デントシテ忽チ堀伊賀守ノ一隊ニ會フ。

按スルニ堀伊賀守及ビ京橋組ハ初メ共ニ役所警護ノ任ニアリ、山城守鎮撫ノ任ヲ帶ブルモ逡巡踟躇容易ニ發セズ、城代是ニ於テ伊州ヲ召シ命ジテ共ニ出

馬ヲ命ズ、即チ伊州先ヅ發スル也、是ヨリ先キ城州玉造組ノ援ヲ請フ、援兵至レバ宜シク出陣スベキナリ、既ニ阪本本多等ノ至レバ之ヲ要シテ大炮ヲ借ント請フ、然ラバ敵ヲ茲ニ引受テ一舉塵殺ノ計アルカヲ思ハシム、既ニ防禦成ラントスル時、又竊ニ天神橋ヲ斷テ鹽軍ノ來路ヲ絶ツト云フ、此時城州身早ク甲冑ヲ被テ而シテ出陣ノ意ナク、既ニ大炮ヲ得テ而モ茲ニ禦グノ決意ナシ、只斯クノ如ク外ニハ鹽軍ヲ恐レ、内ニハ援兵玉造組ノ内心ヲ疑ヒ、只一身ヲ庇シ一時ヲ苟モセントスルノミ、故ニ本多阪本等憤慨之ニ出馬ヲ勸ムル三回ニ及デ漸ク起タントス。

浪華騷擾記云 拙者共兩人申合候は、昨年甲州一揆の節勤番は城中にのみ引籠り居、おめくくと城下を焼拂はせ候段、是迄は嘲り居ながら、今實地に臨み候へば彌張屋敷内に引籠り、市中放火を詠め居り候てはあまり言甲斐なき事と憤激いたし、又々山州前へ罷出出馬の事す、め候得共、山州餘程臆し候様子にて、元氣も無之に付申述候は、東照宮御社最早危く相見え

御家にも拘
はり可申

申候、右御社の儀は平常御神體遷座の節さへ、御奉行衆御持前に相成居候處、かくの如き大變にてさへ、御出馬も無之御焼失を御見物被成候ては、乍憚御家にも拘はり可申旨申述候得ば、山州も其節始めて心を取直し候様子にて、然らば出馬可致との事に相成云々。

此ノ時ニ當テ兩目付市中巡邏ノ注進城内ニ櫛ノ齒ヲ引ク如ク、曰ク敵北船場ニ現ハル、曰ク横堀ヲ越エ上町ニ侵入ス、曰ク鹽軍中船場ニ入ルト勢極テ猛烈ナルニ及デ、城代伊州ヲ召シ直ニ場所出動ヲ命ズ、伊州即チ馬ヲ驅テ東役所ニ赴キ命ヲ城州ニ傳フ、城州本多坂本等ノ忠告ニ止ムヲ得ズシテ出馬ヲ決シタルモ評議區々トシテ決セズ、伊州是ニ於テ先ヅ京橋組ノ兵ヲ率テ發スト云フ格之助軍ノ今ヤ平野橋ヨリ高麗橋方面ニ向テ引返スヤ、忽然鳥町方面ヨリ炮聲頻ニ起リ遙ニ堀伊賀守ノ兵來ルニ遇フ、格之助之ヲ望テ好敵逸スベカラズト、衆ヲ勵マシテ之ト應戰ス、鹽軍勢驟雨ノ如ク炮擊最モ猛烈ヲ極ム、偶々伊州ノ馬驚キ起ツ伊州鞍上ニ堪ヘズ俄然倒マニ馬ヨリ落ツ、城兵之ヲ見テ主

第一回戦

第一回戦堀
伊賀守落馬

將丸ニ當テ斃ルト思ヒ敢テ之ヲ救ハントセズ、城兵算ヲ亂シテ敗退ス、鹽軍勝ニ乘ジテ之ヲ追撃セントス、格之助之ヲ止メ孤軍却テ兵ヲ失フヲ恐レ、徐ニ軍ヲ收メ遠ニ退テ淡路町ノ本隊ニ合ス、伊州モ亦敗軍ヲ治メテ御祓筋會所ニ入り息スト云フ、是レ此日ノ第一回戦ニシテ格之助初陣ノ功名トナス、若夫レ堀伊州京橋組ノ敗亡ニ至テハ相傳テ其醜ヲ笑ハザルナシ、堀伊州ノ敗レテ會所ニ入ルヤ此ノ時跡部城州初テ發ス。

浪華騷擾記云 纏持馬印は眞先へ進み候役割故、誰あつて持候者無之、折角持たせ候へば何時の間にか遁去り候様にて、致方無之折節、穢多詰合居候故大小を爲帶纏を渡候得ば、此者は無分別の者共ゆるゑ、一向懼るゝ氣色もなかくかづき眞先に進み候に、今其跡へ引續き人數一同山州も出馬に相成候處、其時は最早時刻も八ツ時過ぎに有之候べき、武家の奉公人穢多にもおどり候ていたらく、且早朝より小田原評定のみに時を送り、かくの如く遅刻いたし候次第、萬端の様子是等にて御推察可被下候跡にて承り候得ば山州には前夜の返り忠のものより事柄承

知にて第一自分ならはれ候に存候故臆候歟(原註)

十九日午後八時半格之助軍ノ上町ニ堀伊州ノ第一軍ヲ擊破シテ勝ヲ本隊ニ報ズルヤ、先生之ヲ聞テ初テ兩奉行ノ城兵ノ援ヲ得テ出動セルヲ知リ、即チ令シテ兩軍勢ヲ合シテ一トナリ進テ兩奉行ヲ邀擊セント欲ス、因テ軍ヲ進メテ平野橋ノ東ニ至レバ忽チ跡部城州ノ馬標骨屋町筋ヨリ内平野町角ニ現ル、ヲ見ル、先生勵聲衆ニ令シテ曰ク奸賊城州ノ軍見ユ是レ彼レ自ラ死ヲ送ルモノ今日ノ事彼ヲ獲テ甘心セバ又望足ルト謂フ可シト、攻撃ノ命下ルヤ時ニ敵ト距離一丁半程ニ在リ鹽軍即チ敵ノ馬標ヲ望ンデ大炮一發鯨波ヲ作テ威嚇攻撃ヲ試ムルヤ、城兵未ダ一發ヲ開カズ砲聲ノ響突喚ノ聲ニ隊伍擾亂忽チ内淡路町方面ニ潰走ス、跡部城州ノ馬亦之ニ驚キ狂奔逸騰シテ城州落馬ス、城兵愈亂ル此時陣代畑佐秋之助馬上聲ヲ勵マシ穢キ振舞卑怯ナリ返セ／＼ノ聲ニ部兵ノ氣勢漸ク立直リ、炮火ヲ開ケル時既ニ早ク松屋町ニ出デタル阪本鉉之助ノ一隊ハ俄ニ引返シ、又鹽軍ニ向テ炮火ヲ開クニ及ンデ鹽軍中民兵ノ隊伍先ヅ崩

ル、然レドモ鹽軍尙ホ屈セズ混戰之ヲ久ウシ機ヲ見テ平野橋ヲ西ニ渡テ退ク、是レ此ノ日ノ第二回戰ニシテ平野町衝突戰ト稱セラル、モノ、初ニ城州ノ軍ヲ破レルモ後畑佐阪本ノ挾擊ニ會テ遂ニ退却ノ止ムナキニ至ル、其ノ混亂ノ狀ハ阪本鉉之助モ亦夢中同様ト稱スルニ見ルベシ

咬榮秘記云 畑佐秋之助の心付にて、最先に跡部の纏を立させ、此纏持の後へ貞が参り、其次へ同心を二行に立て行きしが、纏持が折々立留る後より、さあゆけと催促すること度々也、東堀にて賊徒の近くなりて濱かわへ出でんとせし時、古市丈五郎が先は炎上なれば跡へ戻り吳よと袖引て申せしを、貞承知せずして先へ行し時丈五郎に附て纏持は引返せしが、其後貞が先へ纏持は立たざりし、借此の道筋杯も一向に覺へず、賊徒と戦しも何町にてありしや、西を向てやら北を向てやら、夫さへろくに覺へず、畢竟申さば夢中同様といふものなり。

按スルニ平野町ノ衝突ニ於ケル若シ鹽軍ニシテ何等カ堡壘ノ得テ以テ踏止

ルノ足場ヲ有セシナランニハ、城兵ヲ粉齧シテ之ヲ城中ニ壓迫スルノ必シモ難カラザリシナランモ鹽軍ノ援兵ハ多ク武器ヲ有セザルノ群衆ニシテ、此等ノ援兵ハ城兵ノ出動ヲ目撃スルヤ既ニ大半散亂シ、平野町ノ一戦ヲ經テ殘ル者僅ニ百餘人ニ過ギザリシト云ハ或ハ事實ナルベシ、而シテ百餘人又木刀竹槍アルノミ銃炮隊ハ僅々二三十人ニ過ギズ勢退却ノ止ムヲ得ザル所以トスベシ、而モ其隊伍ヲ整テ平野橋ヨリ淡路町ニ引揚ゲタル、又寧ロ敵ヲ市中ニ誘出シテ之ヲ掩撃スルノ策ト見ルベキカ。

此ノ時ニ當テ城兵ハ更ニ勢ヲ加フルヲ見ル、

即チ堀伊賀守ノ兵ヲ引テ茲ニ會スルアリ、是ニ於テ城州伊州路ヲ分テ鹽軍ヲ市中ニ追躡ス城州ハ思案橋ヲ渡テ西ニ、伊州ノ兵ハ南ヨリ本町橋ヲ渡テ西ニ並ビ進ム。

咬菜秘記云 玉造同心猪狩耕助が何やら話の序に申すは、此度跡部殿は大分跡へ引き下つて、御出にて銘々には先へ行け〜と毎々世話を致され、其

跡部山城ノ
怯懦

上合點の參らぬは何町とやらを通る時、通つた道の木戸をしめて吳よと私共へ御頼これあり、これは若し跡から賊にても參らうかと申御用心にやと話せし。

既ニシテ跡部城州先手ノ兵ノ堺筋ニ現ハル、ヤ、鹽軍ノ前衛先ヅ砲火ヲ開テ之ト相對ス時ニ其距離凡ソ一町斗リ、城兵又亂射之ニ應戰ス、時ニ鹽軍ノ勇士庄司義左衛門、梅田源右衛門等大炮ヲ放テ能ク戰フ、轟然既ニ三發ヲ送ルニ及ンデ城兵漸ク亂ル鹽軍更ニ一發ヲ放テ勝ニ乘ジテ之ヲ蹂躪セント欲ス、而シテ四發目未ダ放ツニ及バズ、城兵中阪本鉉之助本多爲助等味方ノ危キヲ見テ列ヲ離テ近ク進ミ左右並デ十匁筒ヲ源右衛門ニ擬ス、鹽軍炮手金助即チ左側民家ノ用水桶ニ身ヲ隠シ却テ銃ヲ裝メ鉉之助ニ向フ、爲助早ク之ヲ知リ鉉之助ニ注意スレドモ通ゼズ、爲助因テ自ラ用水桶ノ陰ニ金助ヲ狙撃ス、同時ニ金助ノ銃丸來テ鉉之助ノ陣笠ヲ貫ク、此ノ瞬間鉉之助ノ擬スル所一發覘違ハズ源右衛門ヲ射テ左脇ニ中リ右肩ヲ貫ク、源右衛門遂ニ斃ル而シテ金助

梅田源右衛
門倒ル

ノ丸鉦之助ヲ斃スヲ得ズ。

三七〇

咬菜秘記云 貞が打留たる梅田源右衛門は彦根の藩より出たるもの、由、二十三五歳位にて餘程丈夫なる大兵にて、死體改見れば黒羽二重の紋付に、八丈鳥の下着を着し皆紅裏の小袖にて、おちよばからげにして黒羅紗の羽織を着し、股引もせず、萌黃真田のたすきを掛け是は跡に徒黨のもの、相印にて巾廣き萌黃真田のたすき悉く掛け素足に草鞋をして、大小も相應の拵の様にありたり。初め梅田は西の端に百目玉筒の車臺に取付き居るを見たりしが、其節梅田と顔を見合せしも、源右衛門は夫まで貞が覗ひ寄るを更に存せず、始て顔を見合せ實に驚き入たる顔色にて俄に致方もなかりし哉、何の所作も出ぬ内に即時に打倒したり、其場所は十間斗りと存す。

青天霹靂云 阪本鉦之助ハ大阪ノ砲術指範役ナリ、是役ヤ鉦之助以爲ラク梅田源右衛門ヲ撃タバ餘ハ恐ル、ニ足ラズト、煙燄蔽塞スルニ乗ジ、小銃ヲ持シテ街頭ノ檐溜ニ沿ヒ、眇視禹歩シテ徐ニ進ム、源右衛門ノ從者疾ク之

ヲ瞥見シテ亦銃ヲ取テ之ニ擬ス、本多爲助ト云フ者アリ、其狀危ヲ見テ兩聲叫テ鉦之助ニ報ズ、鉦之助顧ミズ、爲助愈危ミ、銃ヲ舉テ源右衛門ノ從者ヲ狙ヘバ、則チ鉦之助ノ丸已ニ源右衛門ニ中テ、源右衛門從者ノ丸亦鉦之助ノ釜笠ニ中テ止ム、鉦之助銃ヲ發シテ急ニ身ヲ地ニ附ス、故ヲ以テ免ル、爲助ノ丸中ラズ、於是平八郎ノ衆大ニ潰ユ。

鹽軍遂ニ鬪將梅田源右衛門ヲ亡フ、既ニシテ又庄司義右衛門傷ヲ負フ、是ニ於テ形勢一變鹽軍色沮ム、時ニ城軍ノ將畑佐秋之助機ニ乗ジテ城兵ヲ勵マシ攻撃甚ダ急ナリ、鹽軍兵多クハ散亂シ餘ス所八十餘人力戰シテ退ク、偶々本町通ヲ迂回シ來レル堀伊州ノ軍又來リ會ス、鹽軍惡戰苦鬪安田圖書、松本麟太夫又虜トナル。

天満水滸傳云 淡路町にて大鹽方惣崩れに敗走の折、多數中より一人取て返し、勝誇りたる多數の中へ幕地に面も振らず突入りしは、是ぞ則ち松本麟太夫にて其年僅に十四歳、白綾の絹にて鉢巻し、水車の如く長刀を振廻し

當るに任せ難伏せ難立て勢猛く働さける是が爲め奉行方にも疵を蒙るもの
多かりしが、終に多勢に取巻れ運拙くも生捕となれり。

鹽軍是ニ至テ衆寡敵セズ、先生衆ヲ麾テ堺筋ヲ淡路ニ退ク、此時忽チ白袴ノ一
少年幕地ニ走テ城兵前咫尺ノ處ニ向テ火矢一發ヲ放ツモノアリ、是レ即チ鹽
軍慄慄ノ士大井正一郎ノ城兵ノ追躡ヲ阻止スルガ爲ニ爲ス所、果然火矢爆發
シ、城兵驚愕一時左右ニ披靡ス、鹽軍將士遂ニ圍ヲ脱シテ遁ガル、城兵恐テ
又追ハズ、鹽軍終ニ其ノ之ク所ヲ知ラズ。

青天霹靂云 平八郎ノ衆潰ユル、平八郎モ亦其支フベカラザルヲ知リ引テ淡
路町ノ堺筋ニ至リ、其衆ヲ顧ミレバ僅ニ八十人ニ過ギズ、平八郎曰ク吾ノ
山城守ヲ獲ザルハ天ナリ、然ドモ是舉ニ依テ饑食少シク得ル所アリ、有司
鑑戒シテ非違ヲ警メテ富商輩又驕奢ノ風ヲ悛メバ吾事終ル、強テ死戰ヲ要
セザルノミト、其衆ヲ解散シ腹心ノ士數人ト夜ニ乘ジテ潜行八軒家ニ至リ、
小艇ニ乘テ遂ニ踪跡ヲ晦マス、時ニ夜既戌刻ナリ。

小艇ニ乗ジ
テ踪跡ヲ晦
マス

先生遺族七
人京ニ捕ハ
ル

十九日夜深更橋本忠兵衛獨リ大和屋作兵衛ヲ伴ヒ、窃ニ伊丹ニ赴キ豫テ託スル
所先生ノ遺族ヲ紙屋幸五郎ノ家ニ訪フ、ゆう、みね驚キ故ヲ問フ、忠兵衛告
グルニ今日義舉ノ一事ヲ以テシ、先生ノ遺命ヲ傳テ自裁セシム、二女既ニ決
スル所アルガ如ク從容敢テ驚カズ、且ツ弓太郎い等幼兒女ヲ殺スニ忍ビズ、
願クバ保育ノ託スル所ヲ得テ死ナント請フ、忠兵衛之ヲ諒トシ翌朝相携テ紙
屋ヲ辭シ丹波路ヲ經テ、窃ニ廿五日夜京都ニ入ル伊勢參宮ノ者ノ如ク装ヒ柳
ノ馬場旅館生麥屋彦兵衛ニ泊ス、將ニ是ヨリ橋本氏親戚ノ美濃苗木ニ在ル者
ヲ訪フテ後事ヲ託セントス、二十七日官ノ諜知スル所トナリ、橋本忠兵衛以
下七人町奉行梶野土佐守ノ爲ニ捕ハレ、二十九日大阪ニ送ラル、沿道諸民目
送堵ノ如シ人々涕泣セザルハナシ、或ハ伏拜聲ヲ放テ號泣スルモノアルニ至
ル。

二十日宮脇志摩吹田ノ邸ニ自盡ス志摩ハ先生ノ叔父ナリ、堺筋戰中ノ砲車ヲ檢
シテ其名アルヲ見、二十日玉造與力八田又兵衛高橋佐左衛門等二十餘人ヲ遣

ハシ吹田ノ邸ヲ圍ム、至レバ既ニ自殺ス、或ハ云自殺ヲ裝テ捕手ヲ免ルト、八田高橋等檢セズ歸ル、志摩遂ニ免レザルヲ知リ廿一日自殺水ニ投ジテ死ス、十九日志摩變ヲ聞テ長柄ニ至ル機ヲ失シテ及バズ歸ル也。

二十日夜白井孝右衛門、杉山三平二人伏見奉行加納遠江守ニ捕ハレ、廿五日大阪ニ送ラル指圖役以下與力足輕六十餘人三十石船三艘ニ分乘ス、鐵炮二挺左右ヲ警ム、淀川護送斯ク如キ近代未聞ト稱セララル。

二十二日瀬田濟之助河内高安郡恩知村ニ、渡邊良左衛門同志紀郡田井中村ニ共ニ自殺ス。

二十五日高橋九右衛門、柏岡源右衛門茨田軍次等自首ス。

三月初メ庄司義左衛門奈良奉行ノ手ニ捕ハル五日大阪ニ送ラル。

三月九日近藤梶五郎天滿自邸ノ燒跡ニ自殺ス。

大井正一郎、柏岡傳七、深尾才次郎等相携テ三月十七日能州ニ走テ潜伏ス、正一郎四月京都ニ捕ハレ、柏岡深尾氏能州ニ捕ハル。西村利三郎三月十八日津

ニ走ル、四月江戸ニ逃ル、僧冷月ノ弟子トナリ名ヲ別善ト改ム、五月九日死ス。

其他横山文哉、白井儀次郎、上田孝太郎、木村司馬之助、堀井儀三郎、安田圖書、松浦誠之、但馬守約及ビ船若寺村卯兵衛、獵師金助、曾我岩藏、植村周次前後皆捕ハル、而シテ先生父子其ノ行ク所ヲ知ラザル也。

三月廿六日人ノ先生父子誘匿シテ大阪靱油掛町美吉屋五郎兵衛ノ家ニ在リト告グル者アリ、五郎兵衛ハ阿州協町ノ士鹽田氏ノ後更紗染ヲ以テ業トス、五郎兵衛ノ妻ハ即チ先生妾ゆうノ姉也、先生今次用ユル所ノ旗幟皆ナ其手ニ成ルト稱セララル、故ヲ以テ是ヨリ先キ五郎兵衛奉行所ノ糾問ヲ受ケ既ニ町預トナリ以テ今ニ至ル、此頃五郎兵衛ノ婢其家ニ歸ルモノアリ婢ノ家平野郷ニアリ、主家ノ人口多キヲ加ヘズ饘炊量多キヲ怪ミ語ル、郷人之ヲ土井大炊頭陣屋ニ訴フ、時ニ平野郷土井氏ノ所領タリ、大炊頭乃チ奉行ニ命ジテ五郎兵衛ヲ糾問セシム、依テ以テ先生父子隱匿ノ實ヲ得タリト爲シ、廿七日昧爽城代奉行

先生父子自
焚說

各其部下數十人ヲ派遣シ力ヲ合セテ美吉屋ヲ包圍ス、人々恐テ敢テ近ク者ナシ、既ニシテ屋內轟然トシテ砲聲アリ、尋テ爆然火室中ヨリ發ス衆火ヲ望ンテ惶惑惜ク所ヲ知ラズ、既ニシテ火消ユルニ及ンデ火中求メテ二人ノ死屍ヲ得タリ、之ヲ檢スルニ及デ乃チ僧ナリ、惣身燒爛面貌亦知ルベカラズ、二屍俯伏懷中往來通券アリ、曰ク天龍寺僧雷門、曰ク觀永ト、雷門ヲ以テ先生トシ、觀永ヲ男尙志ト爲シ以テ天下ニ殉ヘ先生父子共ニ獲ラルト爲ス、然モ人之ヲ信ズルナシ、或ヘ遁テ筑紫ニ在リト云ヒ、又支那ニ遊ベリト云フ。

結論

按スルニ先生弔民唱義ノ舉ノ結果ハ大略上述ノ如シ、此ノ舉ヤ時ヲ以テ云ヘバ二月十九日丑ノ上刻ヨリ戌ノ下刻ニ終ル僅ニ數時間ノミ、兵ヲ以テ云ヘバ前後三回戰ニ過ギズ、然レドモ吾黨ヨリ之ヲ見レバ疇昔ノ計一朝ニ洩レテ猶ホ突嗟機ニ臨デ變ニ應ジ能ク奉行ノ機先ヲ制ス、假令所志ノ萬一ニ酬ユルニ足ラズト雖モ、此舉偶々以テ奸商驕民ヲ懲ラスニ足り、又屢々暴君酷吏ヲ驚カスヲ得タル亦望外ノ志ヲ遂ゲタルモノト爲ス、若夫奉行跡部山城ニ至テハ既ニ返忠ノ内訴ヲ受テ密謀ヲ二日ノ前ニ知悉ス、若シ能ク之ニ處スルノ善法ヲ講ゼバ事遂ニ此ノ大變ヲ見ルコト無ウシテ止ムベキニ、而モ彼ヤ怯懦苟安事ヲ未發ノ前ニ防グ能ハズ、事發スルニ及デ尙ホ狐疑逡巡遂ニ市民ヲシテ此ノ兵火ニ苦シマシム、失敗、酷薄ノ罪免カル、所ナシ、先生敗殘ノ餘憤ダモ兵火三晝夜大阪ヲ包ミ、近藩兵ヲ動カス凡ソ十餘藩、尙且ツ警報相備ヘテ數十里ノ外險要悉ク藩鎮ノ兵ヲ見ル、是レ實ニ天草亂以後二百年未ダ曾テ有ラザル所ナリ、只是レ先生敗餘ノ一舉ニシテ斯クノ如シ、若夫先生弔民王道ノ計策方略ノ如クナルヲ得ンカ、先ヅ首足所ヲ失フモノハ跡部堀ノ兩奉行ナリ、兩奉行ニシテ其首ヲ授ケンカ、恐ラクハ兵火市中ヲ灰燼トスルノ慘ナカルベシ、何トナレバ之ヲ燒クヨリハ之ヲ徵發シテ窮民ヲ救フノ便ナレバナリ、既ニ跡部山城ノ首ヲ貫テ陣頭ニ掲ゲ、窮民ヲ率キテ直ニ城代ニ迫ラバ大阪城ノ運命モ亦未ダ知ルベカラズシテ、一タビ神武王政ノ興復ヲ以テ四方ニ誥グルアラバ直ニ明治ノ維新ヲ見ル能ハ

城ニ至テハ既ニ返忠ノ内訴ヲ受テ密謀ヲ二日ノ前ニ知悉ス、若シ能ク之ニ處スルノ善法ヲ講ゼバ事遂ニ此ノ大變ヲ見ルコト無ウシテ止ムベキニ、而モ彼ヤ怯懦苟安事ヲ未發ノ前ニ防グ能ハズ、事發スルニ及デ尙ホ狐疑逡巡遂ニ市民ヲシテ此ノ兵火ニ苦シマシム、失敗、酷薄ノ罪免カル、所ナシ、先生敗殘ノ餘憤ダモ兵火三晝夜大阪ヲ包ミ、近藩兵ヲ動カス凡ソ十餘藩、尙且ツ警報相備ヘテ數十里ノ外險要悉ク藩鎮ノ兵ヲ見ル、是レ實ニ天草亂以後二百年未ダ曾テ有ラザル所ナリ、只是レ先生敗餘ノ一舉ニシテ斯クノ如シ、若夫先生弔民王道ノ計策方略ノ如クナルヲ得ンカ、先ヅ首足所ヲ失フモノハ跡部堀ノ兩奉行ナリ、兩奉行ニシテ其首ヲ授ケンカ、恐ラクハ兵火市中ヲ灰燼トスルノ慘ナカルベシ、何トナレバ之ヲ燒クヨリハ之ヲ徵發シテ窮民ヲ救フノ便ナレバナリ、既ニ跡部山城ノ首ヲ貫テ陣頭ニ掲ゲ、窮民ヲ率キテ直ニ城代ニ迫ラバ大阪城ノ運命モ亦未ダ知ルベカラズシテ、一タビ神武王政ノ興復ヲ以テ四方ニ誥グルアラバ直ニ明治ノ維新ヲ見ル能ハ

ズトスルモ豈天下三分ノ略ナシト云フベケンヤ、然ドモ先生弔民王道ノ大義ハ恒常ノ事業苟クモ一時ノ成敗ト相關セザルナリ、何人カ先生今日ノ舉ヲ小トスルヲ得ン、世上或ハ先生ノ此舉ヲ以テ徒黨一揆ノ類トナシ、或ハ反逆謀叛ヲ以テ議スル者アリ、是レ功利ノ徒成敗ノ跡ニ就テ云フ、霸道詐術ノ餘習ノミ、訓詁詞章ノ流弊ノミ、吾故ニ聊カ之ヲ闢ク、夫與黨ノ末跡戰後紛々ノ事情ニ至テハ他日之ヲ詳述スル所アルベシ故ニ今之ヲ略スト云フ。

大鹽平八郎傳終

大正九年十二月廿三日印刷
大正九年十二月廿五日發行

大鹽平八郎傳
定價 三圓八十錢

著者 石崎東國

發行者 東京市京橋區橋町十五番地
株式會社 大鹽鑿閣
右代表者 面家莊信

印刷者 東京市京橋區南船場町五番地
牧口駒三郎

印刷者 東京市京橋區南船場町五番地
牧口印刷所



發行所

東京・京橋橋町
大阪・三休橋南
株式會社 大鹽鑿閣

（發售）東京三三六一八番
大阪二七一五五番

エ 6449
32434
9

蜂谷柳莊評釋
山陽詩鈔評釋

定價一圓五十錢
郵稅十錢

雲井龍雄
杉原夷止
訓手記

王陽明傳習錄

定價一圓五十錢
郵稅十錢

橋京東 閣鏡大 橋休三阪大

終